

ゼミナール紹介

『嵐が丘』から見るイギリス文化



馬場 未起子 教授

過去の
卒業研究テーマ

イギリス19世紀小説をテーマに、ハーディやブロンテを研究しています。4年次ゼミでは、19世紀の小説を使ってイギリスの文化を学びます。19世紀イギリスは大英帝国のもとで文化的・経済的繁栄を誇った、いろいろな魅力満載の世紀です。誰でも一度は耳にしたことのある『ジェイン・エア』と『嵐が丘』はヨークシャーの片田舎で育ったブロンテ姉妹によって書かれました。彼女たちの小説世界は、インテリア、食文化、土地と表象、女性問題、死生観、男女の愛など、さまざまなテーマと観点から学習することが可能。それだけ奥行きが深い小説ということです。ゼミでは学生たちは上記のテーマの中から選んで、グループで研究発表。そのあと発表について皆で話しあい、発表の成果や問題点を共有。学期末に向けてゼミにふさわしい研究レポートを仕上げるよう、がんばっています。

- ▶ ゴシック小説として読む『嵐が丘』
- ▶ インテリアから見る『嵐が丘』
- ▶ Jane Eyreにおける聖書のアリュージョン



- ▶ 『嵐が丘』に見る19世紀イギリスの食
- ▶ キャサリンとヒースクリフの愛 (の謎)
- ▶ エミリー・ブロンテの死生観 - 詩と『嵐が丘』から見る<生>と<死>

Linguistic Pragmatics



北尾 キャスリーン 教授

過去の
卒業研究テーマ

I am interested in studying speech acts, specifically using corpus methods. I have done studies using a corpus made up of the subtitles of the US situation comedy Modern Family to study apologies, apology strategies, and the use of apology strategies for other speech acts. In the future, I am interested in studying apologies and apology strategies in a wider variety of situations. I am also interested in looking at other speech acts, such as asking permission and expressing gratitude, which might be searchable and thus could be studied by corpus methods. In addition, I would like to look at the use of data driven learning in the teaching of speech acts in English language classes.

- ▶ The Development of Close Friendships
- ▶ The Influence of Background Knowledge on Comprehension
- ▶ The Influence of First Impression on the Development of Relationships

【学生の声】
コミュニケーションをテーマに3年次にノンバーバルコミュニケーション、4年次にインターパーソナルコミュニケーションについて、グループワークを中心に学習します。私は“さまざまな人間関係においての人々の感情表現の違い”を卒業論文のテーマとしました。ゼミの授業で感情表現が対人関係において重要な役割を担っていることを学び、興味を持ったことがきっかけです。先生にはアンケートの作成方法や統計の取り方などを細かく指導していただきました。

- ▶ “You” messages and “I” messages: Their Influence on Responses to Criticism

イギリスの文化と文学



甲元 洋子 教授

過去の
卒業研究テーマ

私の専門は19世紀のイギリス詩です。しかし当節は「詩」というジャンルが若い人たちに敬遠されがちですので、授業でいきなりロマン派詩などを読むことはできません。そこでまずは外堀から埋めて行くことにして、魅力的な詩人や小説家を多く輩出しているイギリスと言う国の文化背景を学ぶことを考えました。3年のゼミでは、Colin Joyceというジャーナリストが政治、経済、歴史、地理、食物、スポーツなど多岐にわたるテーマで英国を論じた面白いエッセー、*Realise Britain*を精読しています。4年のゼミではMs. Burnettによる*The Secret Garden*をテキストにしています。児童文学書ですので英語は比較的平易ですし、さまざまなテーマから読み解くことが出来る面白い小説です。受講生たちは、作庭、教育、階級、食べ物、心理療法、ニュー・エイジ思想等の色々な切り口から作品を再解釈し、口頭発表を経てそれを卒業研究論文にまとめてゆきます。

- ▶ The Secret Gardenに見るイギリスの食文化
- ▶ 庭とセラピー
- ▶ 囲われた庭の魅力
- ▶ 収縮する19世紀の英国庭園



- ▶ コテージ・ガーデンの歴史
- ▶ Victoriansと窓
- ▶ 温室から見るクリスタル・パレス

英米文学にみる異界伝承



小山 薫 教授

過去の
卒業研究テーマ

専門は17世紀イギリスのピューリタン詩人John Miltonで、神話・宗教・フェミニズムとの関連で作品研究してきました。物語詩や神話・伝承への関心が発端で、3年次ゼミ (Junior Seminar) ではマザー・グース (英米の伝承童謡) を、4年次ゼミ (Senior Seminar) では異界伝承 (天使・悪魔・聖女・妖精・人魚・魔女など) をテーマとし、イギリスの社会と文化、歴史や国民性を学ぶゼミを開講しています。講義もしますが、授業の中心はグループ発表です。ゼミ生は楽しみながら意欲的に準備してくれて、発表後のディスカッションも大いに盛り上がりします。アカデミックな知識や英語力はもちろんのこと、ゼミでの経験を積み上げることで知的好奇心や自信を高め、人間的にも大きく成長してもらいたいと願っています。

- ▶ 映画『ロード・オブ・ザ・リング』にみる円環のモチーフ
- ▶ ヒロインは美女であるべきか - フェミニスト・フェアリーテイルの問いかけをめぐる
- ▶ 『ハリー・ポッター』シリーズにみる差別への告発



【学生の声】

英米の伝承童謡であるマザー・グースや、マザー・グースに関するエッセイの研究を通して、主にイギリスの国民性・歴史・暮らしについて学んでいます。授業では、ゼミ生によるグループプレゼンがメインです。回数を重ねるごとに自身のプレゼン力の向上を実感することが出来ます。また、このゼミではマザー・グースを実際にみんなで歌うという点が特徴的です。声に出して歌うことで、テキスト上だけではわからないマザー・グースの魅力に触れることができます。

- ▶ メリング『妖精王の月』にみるアイルランドの妖精信仰
- ▶ 映画『ロビン・フッド』にみる英雄性 - 史実と虚構のはざま
- ▶ 映画『もうひとりのシェイクスピア』にみる文学の本質

アメリカ南部作家と人種問題



松村 延昭 教授

過去の
卒業研究テーマ

複雑な人種構成からなり広大な国土をもつアメリカには、多様な文化が存在します。ゼミでは、アメリカ全般に関する知識を深めるとともに、各自が興味を抱いたアメリカの文化形態を選び、研究。文学、音楽、映画、宗教、経済、ファッションなど、選択されたテーマはじつに種々雑多ですが、“アメリカ”をキーワードとして統一しています。ゼミ生には、主観的意見を述べるだけでなく、自分の考えを裏づけるために、英語で書かれた文献の精読、ドキュメントからの引用、ネイティブ・スピーカーへのインタビューなど、研究という名に恥じない発表や文章に到るように指導、奨励。また昨年度からは各年次で1回、ゼミ合宿を行っています。3年次の合宿では研究発表の事前準備を、4年次では卒業研究発表会のために短縮した発表の練習をしています。

- ▶ Nat Turner's Rebellion: 奴隷制への黒人の反抗と白人の反応
- ▶ グリム童話からディズニー映画へ
- ▶ アメリカのスポーツ文化とブラック・ソックス・スキャンダル



【学生の声】

松村ゼミのテーマは、アメリカ文化と文学です。学生の研究対象も幅広く、人種差別、ファッション、食文化、スポーツなど、自分の興味のある“アメリカ”について研究をします。私の研究テーマは『若草物語』にみる女性に対する価値観の変容です。1年次の授業で女性の働き方について興味を持ちました。4姉妹の成長物語である『若草物語』と作者のルーザー・M・オルコットを題材に、時代による女性のキャリアの違いについて研究しています。

- ▶ 『風と共に去りぬ』のスカレットはサザンベルか?
- ▶ アメリカのエリート教育: プレップスクールの必要性

2019年度 Junior Seminar は開講されません。

ゼミナール紹介

外国語学習のスタイルとストラテジー



若本 夏美 教授

若本ゼミでは、第二言語習得 (SLA) 研究の中でも学習者間の個人差に焦点をあて「英語 (外国語) の効果的な学び方」を探究しています。論文精読・アクティブな議論を通じた理論研究と4年次の卒業研究や本年で9回を迎える3年次ALPS (Applied Linguistics Projects) に代表される応用言語学関連の実践的プロジェクトワークを軸にしています。バイオニア精神を基調に自分達で新たなプロジェクトを立ち上げ、併せて高い英語運用能力の育成を図りながらグローバルシティズンたらんと切磋琢磨しています。豊中市の小学校との共同プロジェクト小学校外国語活動STEPや大学周辺の環境美化わっかプロジェクトなど「なんでもやってみよう」精神でゼミとして毎年新たなプロジェクトに取り組んでいます。



【学生の声】

若本ゼミは「世界一のゼミ」を目標に活動しています。ゼミの時間はもとより、英語能力向上プロジェクト (ALPS) や EVE、スポーツフェスティバル等の学校行事に参加したり、自立的かつ積極的に私達自身が新たなプロジェクトを企画し、メンバー一人ひとりが輝ける機会を大切にしています。課題や壁に当たったことはありますが、常に新しいアイデアを出しあい、さらに発展したゼミにするためコーチ (若本先生) のサポートのもと、日々笑顔で取り組んでいます。

戯曲の精読から上演へ



辻 英子 准教授

イギリスの劇作家シェイクスピアの演出法を研究しています。同じ戯曲でも、劇場や俳優、演出家が変わると、全く違った印象の作品になります。時代や場所によって変幻自在な姿を見せるシェイクスピア劇への興味はつきません。ゼミでは、劇作品をより深く理解し、英語音声表現、および翻訳の能力を高めるため、主にイギリスの戯曲を日本語字幕付で朗読劇の形で上演することをめざします。授業では、場面の状況、登場人物の心情、観客への舞台効果を考えながら、劇を訳読後、日本語字幕を作成し、秋学期の終わりに朗読上演を試みます。英語力の上達に加えて、台本に描かれた2次元の登場人物を、演技手によって3次元の存在として立ち上げられるという演劇行為の醍醐味も味わってほしいと思います。



【学生の声】

辻ゼミでは「戯曲の精読から上演へ」をテーマに、春学期は劇作品の精読と背景理解、秋学期では実際のパフォーマンスを行います。3年次では「警部の来訪」、4年次では「ウインダム嬢夫人の扇」に取り組みました。メンバー全員で意見を共有しあい、納得いくものを作り上げることに難しさを感じますが、作品をお客様の前で披露した後は大きな達成感を感じます。私はこのゼミで演技をする事の楽しさや表現力を学ぶ事ができました。

過去の卒業研究テーマ

- ▶ A hybrid English learning method: Enjoying learning English through watching movies
- ▶ Nico is mad at me! The relationship between role play and speaking
- ▶ Are you driven by regrets? Influence of trips and short-term and long-term study abroad on motivation to learn English

- ▶ Oh captain, my captain: Teachers' characteristics that affect English learning
- ▶ "What one likes, one will do well" Influence of initial ways of learning upon later learning
- ▶ Can you read toilet paper? A comparison of Japanese and Chinese high school English learners

英語音声表現—発音とリスニング



今井 由美子 准教授

「言語音」に焦点をあて、母語である日本語と学習語である英語を比較しながら、言語についての知識を深めることを目標としています。我々の生活に不可欠な言語について学ぶことにより、phonetics, phonology, sociolinguistics, psycholinguistics, language acquisition, language processingなど、さまざまな分野へと興味を広げることが期待します。普段、自然に聞き、話していることばが「なぜそういう発音になるのか」「どうしてそう言うのか」を説明することはなかなか難しいもの。しかし、外国語として学ぶ英語を通して言語のしくみを知ることが、日本語を知ることにつながり、ひいては自分自身を知ることにもつながります。研究テーマは身近なところたくさん転がっています。そのことにいかに「気づく」か、皆さんの感性の働かせどころです。



【学生の声】

ゼミでは、音声学の視点から英語と日本語を比較し、音的特徴について理解を深めています。課題として与えられたデータから発音に隠されたルールを見つけて出すことで、日々の生活の中で何気なく使用している英語や日本語の発音の規則について気づかされ、新たな発見や驚きがあり大変興味深く感じます。意識して自分の回りを見つめ直すと、あちこちに研究テーマが転がっていることにも驚きます。

過去の卒業研究テーマ

- ▶ 英語の音学 (おんがく) ～リズムとイントネーションを習得するために～
- ▶ マザーグースに隠された秘密 ～韻とリズムが生み出すその残酷性～
- ▶ ジャズ音楽における英語母語話者と日本語母語話者のリズムの捉え方

- ▶ 手話を言語とする者とのコミュニケーションにおける表情の役割
- ▶ オノマトペの魅力 ～言葉のひびきがよい理由～
- ▶ Tongue Twisterと早口ことば ～共通点・相違点を音声学的視点からの考察～

Performance Studies

2019 年度 Senior Seminar は開講されません。



Timothy L. MEDLOCK 准教授

私自身の研究テーマは、演劇論。これを主軸に展開し、演劇を通してイギリス文学を深求することを本ゼミのテーマとしています。具体的には3年次、4年次ともに、まず春学期には優れた芝居を読んで、その作品の重要なテーマについて考えディスカッションします。秋学期には同じ作品からいくつかの場面を実際に演じる練習をして、作品を脚案した映画を鑑賞したうえで、最終的には上演します。このプロセスにおいて大切なのは、物語の中で役者がどのように情景や心情を描写し、表現しているかを読み解くことです。イギリス文学作品の中の代表的な登場人物をゼミ生自身が演じるという体験を通じて、英語による表現力を伸ばし、また登場人物たちの人格や、彼らが抱えているジレンマについて、よりいっそう理解を深めることがねらいです。



【学生の声】

このゼミではイギリスの戯曲を一つ取り上げて、学期末の上演に向けてactingを通して物語を深めあっています。私は仲間と何かを創り上げること、また何よりもShakespeare Productionに強い憧れがあったことからこのゼミを選びました。難しそうなテーマである上にネイティブの先生の授業についていけるかという不安はありましたが、予習を怠らないことと、演劇を楽しむ!という熱い気持ちを持つことで、自然とコミュニケーション力がつき、充実したゼミの時間を過ごすことができています。

異文化コミュニケーション、言語と社会



崎 ミチ・アン 助教

※2016年度よりゼミ開講

私の専門は社会言語学 (言語と社会の関係) です。特に、異文化コミュニケーション、バイリンガリズム、言語とジェンダーについて研究しています。日本では、私たちの日常生活の中で文化背景の異なる人々と接触する機会が増えてきました。人々とより良い人間関係を築くことのできるコミュニケーション能力も今まで以上に求められる時代になってきました。3年次と4年次のゼミでは、言葉も文化背景も異なる人々との間のさまざまな価値観、アイデンティティ、コミュニケーションスタイル、そして言葉とジェンダーについて理解するとともに、英語コミュニケーション能力を高め、分析能力や理論的思考能力の養成をめざします。毎回の授業では、ディスカッション、ディベート、個別あるいはグループのプレゼンテーション等といった色々な方法で授業を進めていきます。



【学生の声】

今なお世界中で愛されているJane Austenの作品。彼女の描く世界は、派手な事件は起こらず、日常の中で起こるちょっとした出来事の積み重ねです。このゼミでは、長年愛され続ける彼女の作品の魅力に迫ります。作中のヒロインと自身の持つ価値観を照らし合わせ、当時の女性像と現代を生きる「自分」とを比較することができます。彼女のユーモア溢れる作品を読むことで、結婚や将来について「自分」を振り返る機会を与えてくれる、そんな魅力的なゼミです。

過去の卒業研究テーマ

このゼミは英語によるパフォーマンスを目的とするゼミなので、一人ひとりが違ったテーマを扱うのではなく、一つの作品を皆で共同研究します。今までに扱った作品は、B. Priestleyのサスペンス劇 *An Inspector Calls* (『警部の来訪』1947)、Oscar Wildeの風俗喜劇 *Lady Windermere's Fan* (『ウインダム嬢夫人の扇』1892) などです。

ジェイン・オースティン『高慢と偏見』の世界



玉田 佳子 教授

19世紀初頭のイギリスの女性作家、ジェイン・オースティンの作品を取り上げ、そこに描かれる女性像について考察します。それほど劇的な恋愛が描かれているわけではないのに、ヒロインたちが紆余曲折を経て結婚にたどり着くハッピー・エンドの物語が時空を超えて21世紀の私たちに訴えかける。その魅力とは何なのか? 古き良き時代のイギリスに生きたヒロインたちの価値観や結婚観などを考察し、さらにはヒロインたちの人生を疑似体験しながら、各自が研究テーマを見つけ、ゼミで発表し、卒業論文にまとめ上げます。作品研究が、学生たちにとって将来の生き方を考えるきっかけになってくれればと思います。そのためにも、学生一人ひとりが自分に合ったテーマを見つけられるように指導し、卒業論文も丁寧に読んで添削。個々の学生を理解し、個性に応じた指導を心がけています。



過去の卒業研究テーマ

- ▶ 「高慢と偏見」にみる恋愛心理学
- ▶ 「高慢と偏見」にみる「現実的な結婚」と「理想的な結婚」
- ▶ 18世紀の女性と現代の女性 一選ばれる女性と選ばぬ女性

- ▶ 「高慢と偏見」にみるJane Austenの緻密な工夫—Elizabethが恋に落ちるまで
- ▶ 「高慢と偏見」のパロディとしての『ブリジット・ジョーンズの日記』
- ▶ 「高慢と偏見」と「花より男子」におけるヒロインの魅力

2015年度卒業Performance

- ▶ "Much Ado About Nothing"